Night of twins

higurasi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　ｔｗｉｎｓ

【Ｎコード】
Ｎ４３８９Ｃ

【作者名】
ｈｉｇｕｒａｓｉ

【あらすじ】
死ねない肉体の双子たちが自らを運命という名の呪縛から解き放つために旅をする…正直かなり厨房ワールド全開です（汗まぁあまり期待しないでください（実在する組織名などが登場しますが気にしないでください）

ONE SHOOT 「ツメタイ鎖」

「ツメタイ鎖」
by higurasi
「兄さま・・・・・」
「ああ行こうか姉さま」
漆黒の闇の中双子の子供たちは屋敷を逃げ出す決意をした・・・・
彼らは小さな小さな、世界で一番小さな殺し屋だった。彼らは特に子供のころから能力に長けていたわけではなかった。ただなんの躊躇いもなく生きているものを殺せた。
彼らには名前がない・・・・・・・・・
なぜなら彼らが捨てられたのはまだ物心つかぬころだったのだから拾われるまで彼らはまるで野良犬のような日々を送っていた朝早く起きてはゴミ回収の係員が来る前に生ゴミを漁りそれを持ち帰り食べるといった生活を送っていた。
そこで現れたのがベルマンだった。ベルマンは彼らに目をつけ屋敷へと連れ帰り殺しの教育を受けさせ殺し屋に仕立て上げたのだった・・・・・・・・・・・・・
彼らはこの3年間ベルマンの言いなりになってただ人を殺してきた、しかし彼らも人間だ、感情がある、ただ言いなりになって人を殺すのにウンザリして来たのだった・・・・・・・・
おっと、いい忘れていたが彼らが殺し屋になったのにはもうひとつ理由がある双子の兄姉は呪いをかけられていた、
それは死ぬことのできないからだ・・・・
それはどんなにバラバラにされようがどんな致命傷を受けても再生し痛みだけが残るその呪いを解く方法はない・・・・・・・・
しかし兄姉は解く方法があると信じその方法を探すために屋敷を抜け出し旅に出る。しかし呪いが解けても屋敷に戻らないと二人で決めていた。なぜなら不死身ではないのだから殺しをしていても仕方

がないそうかんがえていた・・・・・・・・・・
　二人は裏門から外へ出た、彼らの胸は期待に満ちていた。なぜならこのとき彼らは門の向こうにはわずかな希望と自由が待っていると信じていたのだから。
彼らは前々から準備をしておいた車に乗り国外へ逃亡しようと空港へと向かったしかし彼らはひとつ大きなミスを犯してしまった人間というものは大事なときにミスを犯してしまうものだ、彼らの犯したミスとは・・・・・・・
普段彼らの部屋には鍵がかかっており普通は出られないようになっているこれは彼らが逃げ出さないようにとベルマンがつけたものだったのだが彼らにとって開けるのは朝飯前だったしかし普段は鍵を開けることしかしていない彼らにとって開けた鍵を元に戻すのはとても困難なことだった・・・・・・
だからこそ彼らは急いでいたのだ、自分の犯してしまったミスを知っているのだから・・・・・・・・・・・
急いでいる彼らを追うひとつの影があった、その車に載っている人物こそが彼らの養父であるベルマン＝ネオだった。
　彼は警備員かの彼らについての報告を聞き急いで飛び出してきたのだった
「おい運転手！見失うなよ！」
ベルマンの罵声が車内に響く
「あいつらはわしの商売道具だからな！失くしでもしたら大損害だ」
そういいながらベルマンは慣れた手つきで手巻きタバコを巻き始めた・・・・・・・・
「そうだ運転手よ！」
ベルマンが巻き終わった手巻きタバコに火をつけながら言う
「このタバコをわしが吸い終わるまでにやつらに追いつけさもなくば・・・」
「わかるよな・・・・・」
にこやかな笑顔をしながら言うベルマン運転手にはこの言葉の意味

がよくわかっていた。
そんなやり取りが車内で繰り広げられているころ彼らは空港についていた・・・・・・
彼らがチケットを購入し搭乗口へと行こうとしたそのときだった
「きゃあああああああああああああああ」
女の甲高い声がロビーの中を埋め尽くす。声のしたほうを見てみるとベルマンとその部下が女を人質に取りこっちを見ていた・・・・・・
「ふふふやっと見つけたぞ、さぁこっちに戻ってくるのだ。戻ってこないとこの女の命はないぞ・・・・・」
「兄さま・・・・」
少女は少年に呼びかける
「殺れば？」
想定外の言葉にベルマンは唖然とする
「だから殺せばいいじゃん。別に俺たちには関りのないことだしさ。」
「そうかではそうさせてもらう」
ベルマンの部下がそういい引き金に指をかけた、するとそのとき少年が文字道理目にも止まらないはやさで腰の銃を抜き放った彼の持っている銃はＭ５００史上最強のハンドガンだ、成人男性が放っても下手をすると手首を骨折してしまうこんな少年が放てば骨は砕けてしまうと誰もが思った・・・・・・・・・・・・・・
しかし少年は撃ったしかし彼は平然としていた痛みをこらえている様子もなくただ平然としていたベルマンはその場にへたり込んでしまい部下たちもまるで金縛りにあったように動けない少年はベルマンに近付いて行きその眉間に銃を突きつけた
「これでジ・エンドだ・・・・・・」
「まっ、まて今まで育ててやった恩を忘れたか？　」
「育てた？　何の話だ」
「なっ？！」
「俺たちはあの時捨てられていたんじゃないんだよ、お前に拾われ

た三年前あの時俺たちは任務に失敗しちまってな、前の雇い主に捨
てられちまったんだよ、そこでちょうどよくお前が現れた」
「それじゃお前たちはいったい・・・・・・・」
「さぁね、お前の命の価値では答えられるのはここまでだ・・・・・
・・・・死ね」
「やめなさい！」
強い口調で少女が言ったかと思うとその瞬間少年の手の中にあった
銃は
撃ち落されていた
「なにをする！」
少年が言う、しかし少女はそれを無視しベルマンのほうに顔を向け
る。
「あなたたちももう私たちについて無駄な詮索はしないことね、次は殺
すわよ」
そういい少女は去っていこうとし少年もあわててその後を追う。
「待て、お前らはいったい誰なのだ」
「・・・・そうね、サービスで教えてあげましょう・・・・・・・
」
「血の兄姉・・・・・・・・・・・そういえばお分かりかしら・・・・・
」
それだけ言い残すと彼らは去っていった・・・・・・・・・
そう、この出来事はまだほんの序章に過ぎなかった・・・・・・・・
・・・・・・・
これから待ち受けている血と殺戮の旅に比べては・・・・・・・

Он продолжает

TWO SHOOT 「ウゴカナイ心臓」

「ウゴカナイ心臓」
小鳥が朝を告げるようにせわしくなく。そして目がくらみそうになる朝日の向こうに彼らはいた。彼らはベルマンの一軒の後にこの世界の東北に位置するエファニールへときていた。個の町は数年ほど前に国際指名手配犯を頭とした革命軍が前政権を壊滅させ今ではフッカー・マーシー・ジョブキラー・ジャンキーどうしようもない無法者ばかりが集まっている。そして彼らが今いるカリビアンバー「ｄｅａｔｈ　ｓｈｉｐ」にも数えることを諦めてしまいそうなぐらいいる。
「・・・姉さま僕らはいったいどこへ向かえばいいのかな・・・」
「・・・さぁ・・・」
「ベルマン達はまだ僕たちを追ってきているのかな・・・」
「・・・さぁ・・・」
「ねぇ、姉さま・・・」
「何兄さま？」
「・・・僕たちに生きている価値なんてあるのかなぁ・・・」
彼女はその問いに答えずにグラスに入っていた茶褐色の液体を一口飲むとこういった
「誰に生きる価値があって誰に無いかなんて私の決めることではないし、むしろ決められる事ではないと思うわ・・・」
そう言ったっきり彼女は視線をカウンターにおいてあるグラスに落とした
「そう・・・か・・・」
彼はそう言うとグラスの中の液体を飲み干し席を立ちバーテンと一言二言会話をし渡された鍵を持って階段の上へと消えていった・・・
彼女はやはり視線をグラスに落としたままだった・・・すぐ近くで怒鳴り声が聞こえ人を殴る音が聞こえても彼女は下を向いたままだ

ったしかし銃声が響いた途端に彼女は我に戻りすぐに階段を駆け上ろうとしたしかしその行く手を3人の屈強な男性が阻んだその3人のうちでリーダー格らしき男が口を開いた
「お嬢ちゃんどうしたの？パパやママとはぐれちゃったのかな？お兄さんたちが送っていってあげるよ」そう言うと彼らは彼女の腕を強引に掴み彼女を店の外へと連れ出していった。次の日にめったざしにされた男性三人の惨殺死体が見つかったのは言うまでもない・・・
彼は一人ベッドの上に座り込み考えていた「僕たちに生きている価値はあるのだろうか・・・」ただその言葉だけが頭をよぎる・・・しかしそんな彼に今までの疲れに値する睡魔が襲ってきた。さすがの彼も勝てずに夢の世界へと落ちていった・・・
次に彼が意識を取り戻したのは明朝5時だった階下のバーからは時間を感じさせないくらいに怒鳴り声やグラスのなる音が聞こえてくる。
「姉さまはまだ帰ってきていないのか・・・」
彼はそう呟くと身なりを整えそして彼はまるで踊りつかれた人形のようなおぼつかない足取りで階下のバーへと降りていった。バーのかきいれ時は深夜なのだが幸いにも一番端のカウンターが開いておりそこに少年は座ったそこにオーダーを取りにバーテンがやってきた
「坊ちゃん何にしますか？」
バーテンが小ばかにした声でそう聞くと彼は
「※バカルティあるだけ」
そう言うと彼は懐から札束を取り出しそういうとバーテンはあっけにとられた顔をし
「へ、へい！」
そう言うと札束を引っつかみ飛ぶように酒を持ってきた、彼がバーテンの持ってきた酒を飲み始めると横の席の彼とそう年の変わらない少女が口を開いた
「そんなに飲みすぎるとお体に触りますわよ同業者さん♪」

その言葉を聞いた瞬間彼は懐の銃を抜こうとしたのだがそれよりも早く彼女が銃を取り出し少年の喉下に当てていた
「安心して♪今日は戦いにきたわけじゃないから♪」
そう言うと彼女は自分から銃を下ろした
「何の用だ・・・」
少年がそう言うと彼女は口を開いた
「私の名前はクリプト＝バレンタインとある王家の出身よぉ♪そうはいってもぉもう今は国ごと消えちゃったしぃ、私たちがその国の最後の生き残りなんだけどねぇ♪クスクス・・・」
彼女は楽しそうに語り始めた
「私たちはぁとある能力があるのぉ今はまだ秘密だけどぉまた出会ったら教えてあげるわぁ♪」
彼女はそういいながら席を立ったそして少年の後ろをとおるとき彼女は少女から大人へと変わっていた
「じゃあねぇバイバイ♪」
彼女は陽気にそういいながらバーを出て行った。
「今のが能力か・・・しかしそれを使いつづけていれば・・・」
彼はそう呟きながらバーを出て少女の元へと向かった・・・
その頃少女の所へも同じように客人がきていた
「だからぁはなしきけって～の」
ボウィナイフを投げながら一人の少年がそう言う
「五月蝿い・・・」
少女はただ一言だけそう言うとさらに速度を上げて走りながら※ＢＡＲを連射する
「だからぁ僕にそんなもの撃ってもむだだってぇ」
少年はそういいながらその場に立ち止まった。すると瞬時に７．６２ｍｍ×６３の弾丸がわれ先にと少年の身体に打ち込まれる、しかし彼は死ななかった・・・
「だからいったじゃぁん、僕には心臓がないんだからぁ」
少年がそう言うと少女は単発銃を右手から左手に持ち変えると地面

を蹴り跳躍した。そして少年の目の前までくると
「ならば死ぬまで刺すのみ・・・」
そう呟くと少年を後ろに蹴り倒し足の横に付けてあったナイフで刺しまくった。そして幾度刺したかわからなくなった頃に左手にあった単発銃を少年の喉元に当てた。
「答えなさい・・・貴方は何処の所属なの？ＣＩＡ？ＧＲＵ？それともＫＧＢ？」
「残念だけどぉその中のどれにも所属してねぇんだよ！！」
少年の口調がいきなり変わり少女は後ろへと跳ね飛ばされ体勢が逆転した
「死ね」
少年の声が無情に響いたその瞬間だったパシュッという音が暗闇に響き次の瞬間彼女に馬乗りになっていた少年はなぜか彼女の上へと覆い被さるように倒れていた
「っな・・・」
それがサイレンサーをとおる弾丸の音だと気づいたときにはもう遅かった。彼女の額にも穴があき彼女の視界は深い闇に塗りつぶされていた・・・
そして二人の子供が眠ったあとに現れたひとつの影・・・
この影は一体何を示しているのだろうか・・・
そしてもう一組の子供たちも同じようになぞの集団に囲まれていた
そしてその中でサングラスをかけたリーダー格らしき男が一歩前へと進み出てこう言い放った
「大人しく着いて来れば命の保証はしよう。しかし抵抗をすれば命の安全は保証できない、この状況でどちらが賢明な判断かはわかるはずだ・・・そうだろう血の兄姉と死の配達人・・・」
　男がそういい終わるか言い終わらないかの内に二人の子供は背後から銃で殴られ気を失ってしまった・・・
「そう、それは賢い選択だ・・・・」
男性の声が真紅の月の下で無情に響いていた―――

Он продолжает

THREE　SHOOT　「クライ監獄」

「クライ監獄」
ピチャと小さな音を立てて少年の頬に雫が一滴落ちる。その雫の冷たさで彼は目がさめた彼はおぼろげな瞳で辺りを見回しながら自分の状態を確認しココに来るまでの記憶をさかのぼっていた。
「確か俺は謎の男に気絶させられて・・・・」
彼はそう呟いていると黒いコートを着用し煙草をくわえた男性がやってきた。彼がその男性に機を取られている間にその男性は鍵を開け始めた。男性は鍵を開けるとようやく口を開いた
「さぁ、まだ寝ている三人を担いでココを出るぞ」
といい確か先刻バレンタインと名乗った少女と彼の姉を担ぐと牢から出ようとした、そのときに思い立ったように彼はこういった
「おお、そういえば忘れていたなお前の銃だ」
彼はそう言うと少年のほうに向かってＭ５００を投げた
少年が慌ててそれを受け止めると男性は
「弾丸は５発だ、大事に扱えよ」
男性はそう言うと煙草に火をつけながら監獄の前薄暗い廊下を進んでいく、少年は一人残っていた少年を背中に背負い男性の後を追いかけていった。
そして少年は男性に向かってこう聞いた
「他にも武器があった筈だそれはどうした」
男性はそう聞かれると
「そんなものしらん、俺が持っていたのはお前が持っているそれだけだ、ハンターモデルは珍しかったのでな、後学のために持っていただけだ。まぁこれを機に武器を変えても良いんじゃないか？」
男性はそう答えた。
「今さらだがココは何処なんだ？」
彼は最も気になっていた疑問を男性に聞いてみる

「おまえ前はベルマンとか言うやつのところにいたそうだな、ココはそいつが作った生体兵器の研究所で昨日そのベルマンから連絡があり『お前らを拉致しろ』との事だった。だから今お前らはココにいる」
男性は少年の疑問に長々と答えるとそれっきり何もしゃべらなくなってしまった。数十分ほど歩いたところでいきなり天井に取り付けられていた警報機がなり前方の廊下から何十人の人間の足音が聞こえてきた。
「ちっ、気づいたのか」
彼は舌打ちしながらそう呟くと続けてこういった
「おいボウズ大人の戦いっぷりをよく見とけよ」
彼はそういうと懐からデザートイーグルを取り出し、そして前方に向かって構えた、そしてうっすらと人影が見えたときに彼はただ一発だけ弾丸を撃った、するとその弾丸は人影に命中したと同時に爆発した、少年があっけに取られているところを
「ボウズ逃げるぞ」
とそういいながら彼の襟首を引っつかみ一目散に背後へと走っていった。時々彼は通路脇にある細い通路に向かってやはり一発ずつ弾を撃っていた。そして彼の弾丸が命中したと思われる瞬間に爆発音が響いていた。そして彼と男性は薄暗い通路をまっすぐに進んでいき突き当たりの部屋へと飛び込んだ。ソコは倉庫のような場所で廊下よりもさらに暗く唯一窓だけが明るかった。
「おい、大丈夫かボウズ？」
彼は今まで吸っていた煙草を床に投げ捨て新しい煙草に火をつけながら言う。
「ああ、心配は無用だ。しかしこれからどうする？追い詰められたんじゃないのか？」
彼がそういい返すと、男性はニヤリと笑い
「いや、これも逃走経路のひとつだ」
そういうと光の供給源だった窓をデザートイーグルの銃床で叩き割

り彼のほうへと向き直り
「おいボウズお前目を瞑っといた方が良いぞ」
男性はそう言うが早いか彼の襟首を引っつかみ窓の外へと飛び出した。男性は意識を失いかけている彼を無視しアスファルトの上に着地した。近くには姉たちが倒れている。彼は薄れいく意識の中で男性に聞いた
「おっさん・・・・あんた一体何者だ・・・・？」
彼が懇親の力を振り絞って聞いた質問に対し男性は軽軽しい口調で
「おう、自己紹介がまだだったな俺の名前はゼロ＝マスケティアーノだ。それに俺はおっさんじゃないお兄さんと呼べ」
男性が答えたのは自らの名前だけでそれを聞きとどけた直後に彼の視界は真っ黒に塗りつぶされた・・・・
次に彼が目を覚ましたときに見たものは真っ白な天上だった。真っ白な壁に清潔そうなシーツ、雰囲気からして自分が寝ているのはおそらく病院なのだろうと思った。ふと周りを見渡すと姉たちも自分と同じようにベッドに寝ているが目を覚ましそうにはない。彼はベッドから起き上がり着ていた患者用の服を脱ぎ今まで自分が着ていた服に着替えた。彼が着替え終わった瞬間に病室のドアが半ば乱暴に開け放たれゼロと名乗った男が両手に５人分のトーストが乗ったトレーをもって入ってきた。
「よう、起きたのか」
あい変わらず煙草を口にくわえながらそういう
「ああ、ところでココは何処なんだ？」
そう彼が聞き返すと
「病院だ」
と、とても簡潔な答えがかえってきた。
「正確に言えばセントジョーンズ通り６８番地クコル病院１４４号室だ」
「・・・・・・・・・・・・」
彼が何も言えずにゼロを見ていると彼はトレーをテーブルの上に置

きトースト一枚にマーガリンを塗って彼に手渡してきた。
「食っとけ、食ったらすぐに出かけるぞ」
ゼロはそういって彼にトーストを渡して病室から出て行った。
その日は窓から差し込んでくる光がとても明るかった・・・・・

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4389c/

Night of twins

2010年10月10日00時53分発行